

【原著】

AO 入試志願書への英語の資格・検定試験の記載状況

—鳥取大学の事例—

森川 修, 小山 勝樹, 山田 貴光, 小倉 健一, 古塚 秀夫 (鳥取大学)

鳥取大学 AO 入試の志願書にある資格・検定の記載欄への英語の資格・検定試験の記載状況を調査した。2013～2018 年度入試の 6 年間で 41%の志願者が記載していた。また、調査書に記載がある者を含めると、資格取得者は 47%であった。資格・検定試験の種類では、英検と GTEC for STUDENTS の 2 種類で全体の 93%を占めており、その理由として、身近な場所で受験可能なためと推測された。また、地方は都市部に比べて資格取得率が低く、地域差による受験機会の公平性等の観点から問題が生じる可能性が示唆された。

1 はじめに

1.1 大学入学者選抜の改革

2014 年 12 月、中央教育審議会は、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(答申)を取りまとめた。文部科学省は、その答申を受けて 2015 年 1 月に「高大接続改革実行プラン」を策定した。その後、高大接続システム改革会議は、2016 年 3 月末に最終報告を提出した。そして、文部科学省は、2017 年 7 月に「高大接続改革の実施方針等の策定について」として、「大学入学者選抜大学入試センター試験」(以下「センター試験」と呼ぶ)に替えて「大学入学共通テスト」を 2021 年度入試から実施することが明記された。(文部科学省, 2017b)

大学入学共通テスト実施方針では、従来のセンター試験と比較して大きく異なる点として、マークシート式問題の見直しや記術式問題の実施とともに、英語の 4 技能評価が挙げられる。英語の「読む」「聞く」「話す」「書く」の 4 技能を適切に評価するため、民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用する、と実施方針に記載された。さらに、各大学が活用する場合は、できるだけ多くの種類の資格・検定試験を対象とすること、国は、活用の参考となるよう CEFR¹⁾の段階別成績表示による対照表を提示すること、大学入試センターは、高校 3 年の 4 月～12 月の間の 2 回までの試験結果を各大学に送付すること、についても実施方針に記載された。

1.2 資格・検定試験の活用

以前は、大学入試において、実用英語技能検定(以下英検と省略)等の民間の資格・検定試験を活用することに疑問の声があった。鳥取大学では、2004 年度

入試から AO 入試を実施しており、2009 年度入試から AO 入試の志願書に資格を記載する欄を設け、注意書きとして「自己推薦の内容や学業に関連する資格があれば記載してください。例えば、英検、GTEC for STUDENTS、TOEIC Bridge など」と記した。2008 年に高校訪問をした際、複数の進路指導の教員から「英語の資格は、点数化をするのか? もし、点数化をするのであれば、良いとは思えない。資格・検定試験の中には高校で実施するもあり、公平性の担保に大きな問題がある。」との指摘を受けた。

その後、2016 年に鳥取大学入学センターでは、全国の高校等の進路指導担当教員を対象に、多面的総合的評価に関するアンケート調査を行った(回答数 588 件)。『大学は新入試において、英語等の「語学検定試験」(英検、GTEC for STUDENTS、TOEIC 等)の結果を、もっと評価すべきである。』との設問に「非常にそう思う」が 10.9%、「まあそう思う」が 54.3%と約 2/3 が肯定的であった。

定量的な議論は難しいが、民間の資格・検定試験の利用に関して、2008 年に高校訪問をした際と比較して、高校での捕らえ方が変わりつつあると思われる。

1.3 英語教育の現状

ところで、実際に高校生の英語力を把握しなければ、民間の資格・検定試験を入試に活用することは難しい。2013 年に発表された文部科学省の第 2 期教育振興基本計画によると、中学校卒業段階で英検 3 級程度以上、高等学校卒業段階で英検準 2 級程度～2 級程度を達成した生徒をそれぞれ 50%にするとされている。(文部科学省, 2015)

しかし、2016 年度では、中学で英検 3 級を 36.1%、高校で英検準 2 級を 36.4%の生徒しか取得又は相当する英語力を有していない。(文部科学省, 2017a)

したがって、あまり難易度の高い資格・検定試験を導入しても、入試への活用は難しい状況である。

1.4 本研究の目的

このように大学入学者選抜を取り巻く環境、とりわけ英語に関しては大きく変化している。現在、どの程度の高校生が民間の資格・検定試験を取得・受験しているか、資格・検定試験の種類や取得時期、スコア等がわからないと、今後の入試改革において、大学としての活用や対応も難しい。

そこで、鳥取大学で実施している AO 入試の志願書における英語の資格・検定試験の記載状況を調査して現状を把握するとともに、今後の入試改革で活用する上での問題点について検討することを目的とした。

2 調査の概要

2013～2018 年度の鳥取大学 AO 入試の志願書の資格・検定の記載欄へ英語に関する記載の有無、取得した資格・検定試験の種類と取得時期、スコア等について調査した。対象者は、6 年間で 779 名であり、表 1 では鳥取大学 AO 入試志願者数を学科で分け、入試年度別に掲載した。なお、地域学部地域環境学科は改組により、2016 年度入試を最後に募集停止した。

表 1 鳥取大学 AO 入試志願者数 (名)

年度	政策	教育	文化	環境	社会	生物	合計
2013	18	26	15	6	14	66	145
2014	21	19	14	10	5	45	114
2015	36	22	12	9	3	49	131
2016	32	17	11	12	5	61	138
2017	35	16	16	—	6	55	128
2018	34	19	21	—	7	42	123
合計	176	119	89	37	40	318	779

学部・学科名は、以下の通りに省略した²⁾。

政策：地域学部 地域政策学科

教育：地域学部 地域教育学科

文化：地域学部 地域文化学科

環境：地域学部 地域環境学科

社会：工学部 社会開発システム工学科

生物：農学部 生物資源環境学科

2.1 入試年度別

表 2 に入試年度別の英語の資格・検定試験の志願書への記載者数、表 3 には、記載率を掲載した。

表 2 入試年度別英語の資格・検定試験の AO 入試志願書への記載者数 (名)

年度	政策	教育	文化	環境	社会	生物	合計
2013	6	6	6	2	4	29	53
2014	7	8	8	2	1	14	40
2015	11	15	5	2	0	20	53
2016	16	5	4	3	0	29	57
2017	9	11	11	—	3	23	57
2018	16	13	12	—	4	16	61
合計	65	58	46	9	12	131	321

表 3 入試年度別英語の資格・検定試験の AO 入試志願書への記載率 (%)

年度	政策	教育	文化	環境	社会	生物	合計
2013	33	23	40	33	29	44	37
2014	33	42	57	20	20	31	35
2015	31	68	42	22	0	41	40
2016	50	29	36	25	0	48	41
2017	26	69	69	—	50	42	45
2018	47	68	57	—	57	38	49
合計	37	49	52	24	30	41	41

年度を経るにつれて志願書への記載率はおおむね上昇している。その背後には、入試広報において英語の資格の必要性を伝えてきたことに加え、昨今のグローバル化や 1.3 で述べた第 2 期教育振興基本計画といった国の政策の後押しなどの要因が挙げられる。

表 2, 3 では、志願者が自ら志願書の資格・検定の欄に英語に関する記載をした人数や割合を示した。その結果、表 3 で示すように、調査対象の 6 年間では 41%の志願者が記載していた。しかし、AO 入試での提出書類には、志願書以外に調査書があり、調査書は志願者でなく、志願者の所属高校等の教員が作成する。そこには「指導上参考となる諸事項」として「取得資格、検定等」という欄があるが、志願書の資格・検定の記載欄に記入が無く、調査書に記載されている者が一定数存在した。そこで、自ら志願書に記載した者と調査書に記載がある者を合わせて資格・検定試験の取得者とし、その人数を表 4 に、志願者に対する割合(取得率)を表 5 にまとめた。

表 4 から、英語の資格・検定試験を取得しているにも関わらず、6 年間で 45 名の志願者が志願書へ記載していなかった。そのうち、約半数の 22 名が英検

表 4 入試年度別英語の資格・検定試験の取得者数(名)

年度	政策	教育	文化	環境	社会	生物	合計
2013	7	7	9	2	4	30	59
2014	8	9	9	3	2	18	49
2015	11	17	5	2	0	25	60
2016	18	7	5	5	0	35	70
2017	10	13	11	—	3	26	63
2018	16	13	14	—	4	18	65
合計	70	66	53	12	13	152	366

表 5 入試年度別英語の資格・検定試験の取得率(%)

年度	政策	教育	文化	環境	社会	生物	合計
2013	39	27	60	33	29	45	41
2014	38	47	64	30	40	40	43
2015	31	77	42	22	0	51	46
2016	56	41	45	42	0	57	51
2017	29	81	69	—	50	47	49
2018	47	68	67	—	57	43	53
合計	40	55	60	32	33	48	47

3 級の取得者であった。1.3 で述べたように、英検 3 級は中学校卒業段階の能力と判断し、大学の AO 入試の志願書への記載が無意味と考えたためと思われる。また、表 5 から志願者の 47%が資格・検定試験の取得者であることがわかった。

2.2 学科別

次に学科別での記載者数や記載率を表 2, 3 からみると、地域教育学科と地域文化学科が 55~60%と他学科と比較して高かった。これらの理由として、地域教育学科では、AO 入試の第 2 次選考で英文の読解試験がほぼ毎年出題されていること、地域文化学科には、2 年次後期から選択できる「グローバルな文化と地域プログラム」という語学・国際に特化したプログラムがあることが挙げられる。また、生物資源環境学科の記載率は 41%と他の理系学科である地域環境学科(32%)、社会開発システム工学科(33%)よりも高かった。生物資源環境学科では、AO 入試の第 2 次選考で英語に関する口頭試問があり、このことから、英語の必要性を強く感じているためと推測される。

2.3 資格・検定試験の種類

取得した資格・検定試験の種類について、366 名が取得した 420 件(2 種類記載者 47 名, 3 種類記載者 2 名, 4 種類記載者 1 名)を入試年度別にまとめ、表 6 に示した。

420 件の資格・検定試験のうち、英検が全体の 75%を占める 316 件と圧倒的に多かった。次いで GTEC for STUDENTS が 77 件で全体の 18%であり、この 2 種類だけで全体の 93%を占めた。

英検は、2 級から 5 級までの受験地がすべての都道府県にあり、2017 年度の第 1 回検定では、全国約 230 都市・400 会場が本会場として指定されている。また、学校・塾・企業などが団体で申し込む場合、準会場や中学・高校特別準会場として設定されることがある。このように受験地が近くにあるため、非常に多くの者が英検を取得している。次いで多かった GTEC for STUDENTS も身近な学校で受験できる検定試験で、学校によっては生徒全員が受験するところもあるため、記載率が高かったと推測される。

一方、TOEIC や IELTS などは、受験者がきわめて少なかった。その原因として、受験会場の数や場所、受験料、難易度の他に、資格・検定試験自体の存在や内容を知っているかが挙げられる。

表 6 資格・検定試験の種類(名称)(件)

年度	英検	GTEC	全商	TOEIC	その他	合計
2013	55	7	0	0	1	63
2014	43	11	1	0	0	55
2015	52	9	3	0	1	65
2016	56	16	3	3	2	80
2017	54	15	4	0	0	73
2018	56	19	3	2	4	84
合計	316	77	14	5	8	420

正式名称は以下の通りである。

英検：実用英語技能検定

GTEC：GTEC for STUDENTS

全商：全国商業高等学校協会英語検定試験

TOEIC：国際コミュニケーション英語能力テスト

(Test of English for International Communication)

その他は、TOEIC Bridge 3 件(2013 年度, 2016 年度, 2018 年度各 1 件), IELTS 3 件(2016 年度 1 件, 2018 年度 2 件), TOEFL Junior Comprehensive 1 件(2015 年度), GTEC CBT 1 件(2018 年度)。

2.4 資格・検定試験の取得時期

表 7 に、420 件の資格・検定試験の取得時期を調査して入試年度別にまとめた。

大学入学共通テスト実施方針に「大学入試センターは、高校 3 年の 4 月～12 月の間の 2 回までの試験結果を各大学に送付する」と記載されているが、鳥取大学の AO 入試志願者では、高校 2 年での取得がもっとも多く、全体の 44% を占めており、高校 3 年は、31% と少なかった。ただし、鳥取大学の AO 入試の出願時期が 9 月上旬であるため、実質は 5 ヶ月間しかないことを考慮しなければならない。

しかし、高校 3 年の結果しか利用できなければ、3 年次に受験が集中するため、高校等での混乱は非常に大きくなることが予想される。もちろん、取得からあまりにも時間が経過した資格の活用は疑問であるが、TOEIC の公式認定書や TEAP のスコア再発行が試験日から 2 年以内であり、現在、資格・検定試験を利用する大学の多くは、2 年以内の取得を出願要件としていることから「高校 2 年以降に取得」あるいは「出願から 2 年以内の取得」を利用条件とすれば、高校等で混乱が避けられると期待される。

表 7 資格・検定試験を取得した時期

年度	中学以前	高 1	高 2	高 3 以降	合計
2013	5	10	24	24	63
2014	4	14	20	17	55
2015	2	16	35	12	65
2016	3	23	33	21	80
2017	5	13	28	26	73
2018	3	7	44	30	84
合計	23	83	184	130	420

2.5 高校等所在地の自治体の規模

民間の資格・検定試験を利用するデメリットとしては、地方では受験機会が少なく、受験会場までかかる時間など、都市部と地方に格差が生じることが指摘されており、公平性等の観点から議論を呼んでいる。

そこで、都市部と地方に格差が見られるかについて、高校等所在地の自治体の規模で資格・検定試験の取得者数の違いを調査した。方法として、高校所在地の 2017 年 4 月現在の自治体人口が 10 万人未満、10 万人以上 50 万人未満、50 万人以上の 3 段階に分け、入試年度別志願者を表 8、資格・検定試験の取得者数

を表 9、資格・検定試験の取得率を表 10 にまとめた。

今回の高校等所在地の自治体人口を 3 段階に分けた方法によって、都市部と地方の格差が判別できるかについての議論があるかも知れないが、表 10 から人口 50 万人以上の都市部は、人口 10 万人未満の地方に比べて取得率がやや高かった。今回、取得した資格・検定試験の 93% がとても身近な場所で受験できる英検と GTEC for STUDENTS であったが、地域差が見られたと判断した。

表 8 高校等所在地の自治体人口別の志願者数 (名)

年度	10 万未満	10～50 万	50 万以上	合計
2013	45	52	48	145
2014	46	47	21	114
2015	50	50	31	131
2016	52	49	37	138
2017	46	49	33	128
2018	46	47	30	123
合計	285	294	200	779

表 9 高校等所在地の自治体人口別の資格・検定試験の取得者数 (名)

年度	10 万未満	10～50 万	50 万以上	合計
2013	16	22	21	59
2014	18	22	9	48
2015	22	23	15	60
2016	23	26	21	70
2017	23	24	16	64
2018	20	25	20	65
合計	122	142	102	366

表 10 高校等所在地の自治体人口別の資格・検定試験の取得率 (%)

年度	10 万未満	10～50 万	50 万以上	合計
2013	36	42	44	41
2014	39	47	43	43
2015	44	46	48	46
2016	44	53	57	51
2017	50	49	48	49
2018	43	53	67	53
合計	43	48	51	47

2.6 高校の種別

一般的に、農業科・工業科・商業科等の専門教育を主とする高校（以下、専門高校と省略）では、学習意欲を上げるために資格取得を推奨している。実際に、鳥取大学 AO 入試の志願書の資格記載欄へ数多くの資格を記載している場合が散見される。

そこで、英語の資格・検定試験の記載状況を高校の教育課程を普通科・理数科の普通教育を主とする高校（以下、普通高校と省略）と専門高校に分けて調査した。なお、総合学科は専門高校に、英語科は普通高校に含め、それ以外の教育課程の場合、調査書に記載されている取得科目から、センター試験を 5 教科 7 科目で受験できると判断した場合は普通高校、受験できないと判断した場合は専門高校として分類した。

表 11 に教育課程別の資格・検定試験の取得率と資

表 11 教育課程別資格・検定試験の取得率 (%)
(かつこ内は、資格・検定試験の取得者数/志願者数
(いずれも単位は名))

年度	普通高校	専門高校	合計
2013	39 (48/123)	50 (11/22)	41 (59/145)
2014	44 (40/ 91)	39 (9/23)	43 (49/114)
2015	47 (47/101)	43 (13/30)	46 (60/131)
2016	45 (51/113)	76 (19/25)	51 (70/138)
2017	52 (47/ 91)	43 (16/37)	49 (63/128)
2018	54 (51/ 94)	48 (14/29)	53 (65/123)
合計	46 (284/613)	49 (82/166)	47 (366/779)

格・検定試験の取得者数、志願者数を入試年度別にまとめた。2016 年度は専門高校の方が取得率は高かったが、それ以外には大きな差異は見られなかった。

2.7 資格・検定試験のスコア

最後に、資格・検定試験のスコアが、どのレベルに相当するかについて調べた。多くの異なる資格・検定試験のスコアを比較することは非常に難しく、これまでは、それぞれの資格・検定試験を作成した団体が換算表を作成していた。大学入学共通テスト実施方針では、国が CEFR の段階別成績表示による対照表を提示することが記載されており、これを活用することになる。

今回、鳥取大学の AO 入試の志願書に書かれた資格・検定試験のスコアを 2016 年度の資格・検定試験 CEFR との対照表（表 12）によって 6 段階に分けた結果を表 13 にまとめた。

表 13 資格・検定試験の CEFR での段階 (件)

年度	A1	A2	B1	B2	判定不能	合計
2013	21	34	7	0	1	63
2014	21	29	4	0	1	55
2015	18	37	7	0	3	65
2016	18	48	10	0	4	80
2017	20	38	11	0	4	73
2018	12	50	16	2	4	84
合計	110	236	55	2	17	420

表 12 2016 年度資格・検定試験 CEFR との対照表 (資格・検定試験の種類は表 6 で記載したもの)³⁾

CEFR	英検	GTEC CBT	GTEC for STUDENTS	IELTS	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC/TOEIC S&W
C2				8.5-9.0		
C1	1 級 (2630-3400)	1400		7.0-8.0		1305-1390 L&R 945-, S&W 360-
B2	準 1 級 (2304-3000)	1250-1399	980 (L&R&W 810)	5.5-6.5	341-352	1095-1300 L&R 785-, S&W 310-
B1	2 級 (1980-2600)	1000-1249	815-979 (L&R&W 675-809)	4.0-5.0	322-340	790-1090 L&R 550-, S&W 240-
A2	準 2 級 (1284-1800)	700-999	565-814 (L&R&W 485-674)	3.0	300-321	385-785 L&R 225-, S&W 160-
A1	3 級-5 級 (419-1650)	-699	-564 (L&R&W -484)	2.0		200-380 L&R 120-, S&W 80-

鳥取大学の AO 入試志願者で、高校卒業時に到達することが求められている英検準 2 級を取得している者は 2/3 程度であった。なお、表 12 の CEFR との対照表にない全商と TOEIC Bridge は、判定不能に分類した。おおむね年度を経るにつれてレベルが上昇しており、2018 年度では、初めて B2 レベルの志願者が現れた。

3 おわりに

鳥取大学の入試において、AO 入試は約 2%の志願者しかいないが、47%の志願者が英語の資格・検定試験の取得・受験をしていた。サンプル数としては少ないが、いくつかのことが明らかとなった。

まず、資格・検定試験の種類は、英検と GTEC for STUDENTS に大きく偏っていた。今後、2021 年度入試に向けて、多くの受験生がその 2 つの資格・検定試験に集中した場合、その実施に混乱が起きる可能性がある。特に、高校 3 年の結果しか利用しなれば、さらなる集中が予想されるので、資格・検定試験の利用時期についても議論が待たれる。また、地方は都市部に比べて資格取得率が低く、受験機会や受験会場までの距離など地域差に課題が見られ、公平性等の観点からの検討も必要であると思われる。

2017 年 11 月に大学入試センターは、「大学入試英語成績提供システム」の参加要件を公表し、12 月に申し込みのあった 10 種類の資格・検定試験の一覧が発表された。今後のスケジュールでは、2018 年 3 月末を目途に成績提供システムへの参加要件の確認と CEFR 対照表の公表が行われる予定である。多くの種類の資格・検定試験が利用できるが良いが、受験料の問題も考慮して検討すべきと思われる。

鳥取大学入学センターが 2016 年に行った多面的総合的評価に関するアンケート調査で『大学は新入試において、英語等の「語学検定試験」(英検、GTEC for STUDENTS, TOEIC 等)の結果を、もっと評価すべきである。』との設問に対して、「全く思わない」が 4.4%、「あまり思わない」が 30.1%と、1/3 が否定的であることも忘れてはならない。その先生方は、入試に利用する資格・検定試験を高校等で実施することに対して、公平性の問題を心配していると推察される。

英語の資格・検定試験を利用する場合、個別大学とともに大学入試センターや国が、これらの問題に対して十分な対策や理解を得る必要があると考える。

注

- 1) CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) は、言語の枠や国境を越えて異なる試験を相互に比較することができる国際標準で、欧州評議会 (Council of Europe) によって 20 年以上にわたる研究と実証実験の末に開発され、2001 年に公開された。現在では 38 言語で参照枠が提供されている。(英語 4 技能試験情報サイト, 2017)
- 2) 学部・学科名は、2013 年度入試時点の名称とした。なお、工学部改組のため 2015 年度入試から、社会開発システム工学科は社会システム土木系学科へ変更した。また、地域学部と農学部は改組のため 2017 年度入試から、地域政策学科は地域学科地域創造コースへ、地域教育学科は地域学科人間形成コースへ、地域文化学科は地域学科国際地域文化コースへ、生物資源環境学科は生命環境農学科へ、それぞれ変更した。
- 3) 英語 4 技能試験情報サイトの資格・検定試験 CEFR との対照表 <http://4skills.jp/qualification/comparison_cefr.html> 2016 年度旧対照表をもとに筆者が一部修正の上、転載した。

参考文献

- 英語 4 技能試験情報サイト(2017), CEFR について, <<http://4skills.jp/qualification/cefr.html>> (2017 年 1 月 17 日)
- 文部科学省(2017a), 平成28年度「英語教育実施状況調査」の結果について 2017年4月 【結果概要】中学校及び高等学校関係, <http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1384230.htm> (2017年1月17日)
- 文部科学省(2017b), 高大接続改革の実施方針等の策定について (平成29年7月13日) 大学入学者選抜改革について, <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/1388131.htm> (2017年1月17日)
- 文部科学省(2015), 教育振興基本計画 第2期教育進行基本計画 (本文) 2015年6月14日, <http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/136379.htm> (2017年1月17日)